

生徒への援助ニーズのくみとりと 援助の過程をめぐる省察

— 「対話的な自己エスノグラフィ」の手法を参照して —

学籍番号 199202

氏名 岡本 純子

主指導教員 小松 孝至

1. 問題と目的

現在勤務している学校では、過去の指導実践だけでは対応しきれないケースに遭遇することが増えてきた。経験を重ねる中で生徒への指導方法が確立され、ある程度自信を持って生徒と関わってきた私にとって、今までの指導実践の妥当性、自身の独自の生徒との関わり方について改めて振り返る必要があると考えた。

今回の研究を進めるにあたり、自分自身と生徒との関わり方や指導方針について客観的分析を行う上で、「対話的な自己エスノグラフィ」の手法（沖潮、2013）を参照した。この手法を用いて、日々の学校生活の中で、私に関わる生徒、特に「気になる」生徒との関わりに焦点をあて、なぜ、「気になるのか」、また、私が彼らをどう理解し、関わろうとしているのか、関わりの中で何を考え、感じながら指導をしていたのかについて明確にしていくことを目的としている。

2. 省察の方法

2.1 面接の内容

面接で語る内容は、勤務校所属学年（現中学3年生）の生徒とのやりとりが対象である。その中で、私が「気になった」生徒とのエピソードについて、事前に簡単なメモを作成し、面接に臨んだ。メモおよび面接では、生徒とのやり取りとその中で自分が感じたこと、判断の根拠などに着目した。

面接での語りは、計10回、対象生徒は8人（男子4人、女子4人）である。この面接の中から、今回の研究では、3事例を取り上げた。

私は、所属学年8クラスの中で2クラスの副担任である。担当している教科は、英語、担当クラスは6クラスである。ただし、所属学年の英語は週4時間中3時間が習熟度別（少人数）クラスでの学習となっており、1クラスあたり、10人～18人の生徒が少人数教室で、残りの20人～27人の生徒が自教室で学習することになっている。私は、少人数教室の生徒を担当している。

2.2 面接の進め方

メモをもとに時系列にそって語り（20分程度）、対話者（主指導教員）との質疑応答

へと移っていく。1回の面接時間は、40分～50分程度である。

面接後は、ICレコーダーの録音から面接内容を書き起こした記録を作成し、次回の面接までに読み返し、考察内容、疑問点などを面接記録内にメモ書きし、研究のキーワードと
思う部分に印をいれるという作業を繰り返した。

面接を続ける中で、対話者からのアドバイスもあり、過去の面接記録や、その中に私
が残したメモやキーワード部分を再度読み返すことも行った。

面接場所は、大学構内であった。内容はICレコーダーで録音し、メモも含め、研究に関
わるもの全ては、大学院生ロッカー内で施錠保管し、研究を進めた。

3. 省察の具体例

計10回の面接記録の中から、3事例を選択し、考察と分析を行った。この3事例を選
択した理由は、各事例を考察している章の最初に詳細を記述しているので、ここでは、各
事例の概略を簡単に説明しておく。

3事例とも、私が主体的に関わった、あるいは、対応した事例であり、特に、事例1と
事例3は、私が担当している教科（英語）の授業が、きっかけで「気になる」生徒として
注目したケースである。また、この2つの事例では、登場する生徒（MとA）の表情（特
に「目」）に注目して関わった点が共通しているものの、関わりが進展した事例1と最後
まで生徒の意図や考えがつかみきれなかった事例3という対照的なケースであった。

事例2は、勤務校にきて、初めて私が強い感情を抱き、関わった事例である。担任では
ない立場で、担任をしていた頃のような私独自の関わり方に至ったのはなぜかについて考
察することができた。また、過去の指導実践が多く語られており、対話者からの指摘を受
ける中で、私独自の生徒との関わり方の特徴を示すキーワード（「波長」、「楽しむ」）
を発見するきっかけとなった事例である。

4. まとめと課題

今回取り上げた指導実践（3事例）を考察した結果、私と生徒との関わり方の特徴と課題
が明確になった。特に、各事例の中で、私独自の関わり方の特徴を、いくつかのキーワー
ドで分析することができた。生徒の表情に注目し、感情の揺れを把握する（事例1）、「母親
のような」気持ちで関わり、生徒とのやりとりに「楽しさ」を感じる（事例2）、生徒と「波
長」を合わせることができず葛藤する（事例3）である。

課題として挙げていた「取りこぼされてしまう」生徒へ、どういった個別対応をすべきか
について、自らの実践を省察した結果、新たな課題が明確になった。まず、過去の指導実践
が生かせない時、生徒との関わりに消極的になっていたことが明確になった。更に、生徒へ
の個別指導に偏重する傾向から、教員として冷静な判断や対応が十分できるほどの経験や
ノウハウが少ないため、個別対応と学校現場で求められる集団指導のバランスの取り方が
今後の課題として明確になった。最後に、私独自の生徒との関わり方は、自身の経験だけな
く、他教員との連携のもと確立されており、改めて、「チームによる支援」の重要性に気づ
いた。今後は、今まで通り「取りこぼされる」援助ニーズをくみ取る「小さな支援」を継続
しながら、学校現場で求められる集団指導を習得するための自己研鑽に努めていきたい。